朝鮮通信使による風景の記述に見られる風景生成と定着について

Landscape Generation and Establishment of Landscape Expression by Korean Envoys Diplomatic Missions

西嶋啓一郎* 仲間浩一**

Keiichiro NISHIJIMA Koichi NAKAMA

摘要：景観研究にとって、特定の意味づけが風景イメージとして実景に投影される過程を明らかにすることは、風景生成の内容を理解する鍵になる。本論では、歴代の通信使の紀行文と漢詩集をテキストにし、瀬戸内海鞆浦での風景生成を考察した。その結果、通信使の風景記述方法には、次のパターン化された図式が確認された。通信使は、過去の通信使の風景記述を受け継ぎ、洞庭湖や瀟湘八景の風景イメージを実景に投影するため、鞆浦の空間の実体的な要件を確認した。そして、その認識により主体の内面に特定の意味づけが行われた結果、「日東第一形勝」という風景が生成された。このことにより、通信使による鞆浦での風景の生成と定着が明らかになった。

1. 研究の目的と位置付け

風景を構成する様々な要素は、ある特定の意味と結び付けて認識されることがある。また、特定の社会集団あるいは特定の文化圏内で暮らしている人々のあいだで、ある種の風景イメージが共有されている場合、そのイメージは、実景に投影される性質がある。景観研究にとって、特定の意味づけが風景イメージとして実景に投影される過程を明らかにすることは、風景生成の内容を理解する鍵となる。

1607年から1811年までの12回にわたって来日した朝鮮通信使は、経路瀬戸内海鞆浦において、福禅寺対潮楼から見る瀬戸内海の風景を日本で一番だと評価した。その際に意味づけられた風景イメージは、鞆浦の風景を、中国洞庭湖の風景や瀟湘八景に見立てたものであった。そして、この風景生成は、朝鮮通信使が幾代にもわたり定着させてきた評価が下敷きになって行われた。朝鮮通信使の瀬戸内海における風景評価には、西田による研究があり、その図式となっているのが中国の瀟湘八景であることを文献調査により例証している¹⁾。また、第9次通信使(1719)におけ

る申維翰の『海游録』について、風景記述を分析した先行研究では、通信使の風景生成には段階的な発展があり、鞆浦において「神仙境」の意味づけが確信されたことにより風景生成に至ったことが確認されている²⁾。

本論では、これらの先行研究の認識を踏まえ、第1次回答兼刷還使(1607)における副使慶七松の『海槎録』³⁾、第6次通信使(1655)における従事官南龍翼の『扶桑録』⁴⁾、第7次通信使(1682)における訳官金指南の『東槎日録』⁵⁾、同訳官洪禹載の『東槎』⁶⁾、第8次通信使(1711)における副使任守幹の『東槎日記』⁷⁾、第9次通信使(1719)における製述官申維翰の『海游録』⁸⁾、第10次通信使(1748)における従事官曹命采の『奉使日本時間見録』⁹⁾、第11次通信使(1764)における正使趙巖の『海槎日記』¹⁰⁾、福禅寺に残された通信使の漢詩をまとめた『朝鮮通信使漢詩集』¹¹⁾等の現在日本で入手可能な翻訳文献をテキストにし、これらにあらわされた風景評価の意味づけの過程と内容を、年代をおって考察することにより、朝鮮通信使による風景の記述を介して、生成された風景を共有し定着させた経緯を明らかにすることを研究の目

図-1 福禅寺対潮楼からの瀬戸内海の風景

図-2 海潮山磬台寺

*九州工業大学大学院工学研究科 **九州工業大学工学部建設社会工学科

的とする。

2. 研究の方法

(1) 分析の方法

本論では、朝鮮通信使一行の経路の中で、瀬戸内海鞆浦で行われた風景の生成を研究対象にする。歴代の通信使一行は、来日した際には、必ず訪日録の紀行文を編纂し、また書や絵を館舎となった福禅寺等に残している。風景について、通信使が特に執着したのが福禅寺対潮楼から眺めた瀬戸内海の風景であった（図－1 参照）。通信使一行は、過去の記録を読み、過去の通信使たちが賞賛した風景を確認し、さらに賞賛した。その内容は、鞆浦を岳陽に、海潮山磐台寺や福禅寺を岳陽楼に、そして瀬戸内海を洞庭湖に意味づけをし、体験する風景を瀟湘八景に結び付けて鑑賞するものであった。しかしこの場合、通信使一行は、中国内陸部の洞庭湖には実際に訪れたことは恐らくなく、漢詩や山水画などから得た瀟湘八景の風景イメージが、風景を見つめる主体の内面に意味づけられていたと推察できる。そこで3章では、まず、歴代通信使が鞆浦で風景生成を行っている記述をテキストから引用し、時代ごとにそれぞれの時点で、主体が対象景と対峙する状況や風景生成の内容を整理する。4章では、過去の通信使によって記述された鞆浦の風景が、次の通信使に受け継がれ定着する経緯について、それぞれの時代での風景評価の定着経緯をフローチャートにまとめる。そして、その流れから解明できる鞆浦での風景生成における意味づけの図式を考察する。

(2) 瀟湘八景について

洞庭湖は、中国湖南省北部長江南岸にある中国第二の淡水湖である。湖周辺の土地は、平原が広く、土地は肥沃で、気候は温暖湿潤である。湖南省の東北部に位置する岳陽²²⁾は、洞庭湖と長江の合流点にあり、岳陽楼²³⁾は、岳陽古城西門の上に構築され、眼下に洞庭湖、北に長江を望む高さ 20.35m の木造建築の楼閣であ

る。岳陽の西南、洞庭湖の中の東北には、君山¹⁴⁾が島として位置する。君山は中国固有の山岳信仰¹⁵⁾の山で、山上には、二妃墓¹⁶⁾や始皇帝封山印¹⁷⁾などがある。『拾遺記』には「洞庭山水上に浮かび、其の下に金堂数百間有り、玉女之に居り、四時に金石糸竹の音を聞き、山頂に徹す」と記され¹⁸⁾、洞庭湖の下には、神仙境があることを伝えている。

岳陽楼から望む洞庭湖の風景は、古くから漢詩や山水画にあらわされた。宋代には、洞庭湖から注ぐ瀟水と湘水の風水の中から、「平沙落雁」「遠浦帰帆」「山市青嵐」「江天暮雪」「洞庭秋月」「瀟湘夜雨」「煙寺晚鐘」「漁村夕照」の八佳景が定められ、瀟湘八景の風景評価が定着した。これは、北宋の宋迪¹⁹⁾が嘉祐年間(1056～63)に湖南運判であったとき、長沙の八景台に瀟湘地方の煙霞に包まれた山水風景を描き、後、僧の慧洪がこれに詩を賦したのはがじまりといわれている²⁰⁾。

朝鮮通信使によって生成された風景は、これら洞庭湖の風景や瀟湘八景のイメージが下敷きになっており、西田による研究でも指摘されているところである²¹⁾。

3. 朝鮮通信使による鞆浦の風景評価

朝鮮通信使は、釜山を出港し、海路対馬、壱岐、藍島、赤間関、西津、上関、蒲刈を経て、ほぼ一ヶ月から二ヶ月余り、最も長い日数で三ヶ月余りの行程で鞆浦に至っている。来訪する時季は一定ではなく、四季に及ぶ。鞆浦での滞在は一泊が普通であり、長いときでも二泊であった。歴代の通信使の風景記述に基づき、風景を見つめる主体と対象景の関係を表－1にまとめる。

1607 年第 1 次の慶七松の記述では、鞆浦に入校する手前で、海潮山磐台寺（図－2²²⁾ 参照）の僧が、海際で御供物を受け取る様子を船上から眺め、湘水で屈原²³⁾を祭るときのようなとあらわされ、鞆浦の風景が洞庭湖の風景に見立てられた。1655 年第 6 次の南龍翼は、紀行文に多くの漢詩を残している。藍島では「遙

表－1 風景を見つめる主体と対象景の関係

歴代通信使 \ リアリティ	第 1 次通信使 副使慶七松の 『海遊録』	第 6 次通信使 從事官南龍翼の 『扶桑録』	第 7 次通信使 訳官金指南の 『東槎日録』	第 7 次通信使 訳官洪禹載の 『東槎録』	第 8 次通信使 副使任守幹の 『東槎日記』	第 9 次通信使 製造官申維翰の 『海遊録』	第 10 次通信使 從事官曹命采の 『奉使日本時覽見録』	第 11 次通信使 正使趙繼の 『海槎日記』
釜山出港日	1607 年 2 月 29 日	1655 年 6 月 9 日	1682 年 6 月 18 日		1711 年 7 月 5 日	1719 年 6 月 22 日	1748 年 2 月 12 日	1764 年 10 月 6 日
鞆浦到着日	4 月 2 日夜明け	8 月 22 日午後 4 時	7 月 19 日真夜中		9 月 9 日午後 10 時	8 月 28 日午後 2 時	4 月 15 日午後 1 時	1 月 11 日午後 8 時
天気	晴れ	雨上がり	晴れ		晴れ	※不明	曇り	晴れ
滞在日数	一泊	二泊	一泊		二泊	一泊	一泊	一泊
風景記述	あたかも湘水で屈原の祭を祭るときのように	海路の景色を論ずるなど第一とまで通って来た中	海と山の絶景が今	小さい島が近くに或	海に臨んだ高台で眺	船上からこれを見て	所謂福禅寺は前かう	第一の勝景だと当
視界・距離	船上から海潮山磐台寺を望む中距離	望む中・遠距離	望む中・遠距離	望む中・遠距離	中距離	中距離	中距離	中距離
主体の状況	船で鞆浦に接近する	福禅寺に滞在する	福禅寺に向かう		鞆浦に入港するが未	鞆浦に入港する	福禅寺を探す	福禅寺に滞在する
対象景構成	◎海潮山磐台寺 ◎僧	◎瀬戸内海 ◎海島	◎福禅寺 ◎瀬戸内海		◎鞆浦の町並み ◎福禅寺	◎鞆浦の輪郭像 ◎円法寺	◎鞆浦の町並み ◎福禅寺	◎鞆浦の輪郭像 ◎福禅寺

※『海遊録』の鞆浦における記述には天気の記録はないが、「白壁が雲表に照りかがやく」という記述から天気は良かったものと推察できる。

表－2 漢詩における風景評価

テキスト	漢詩	訳	観賞上の特徴	
第6次通信使(1655) 從事官南龍翼の 『扶桑録』より	樓如畫結出區寰 海色秋開甘露寺 三生石上僧驚夢 安得羽衣橫玉笛	鉄鎖高垂斯宿驛 樓台は雲氣樓の如く塵の世から抜き出ており、鉄の鎖高く垂れて眺めるが難しい 海色は秋に甘露寺に開かれ、鐘の音は夜に落星崗を通して来る 三生石上に僧が夢に驚く、萬里の夜の端で旅人が破顔する どうすれば羽衣で玉笛を横に携えて、岳陽樓の明月に洞庭湖の君山に響かすか	○雲氣樓＝東海の三神山のイメージ ○「曉鐘」のイメージ ○「拾遺記」の類型	
第10次通信使(1748) 正使洪啓禧が福禅寺に 残した漢詩 『朝鮮通信使漢詩集』より	前賢乘槎至 海住何所極 孤月留吾客 鐵鳴猶未起	人々説此樓 樹老興同厚 千橙繁群舟 河漢已西流	先賢は舟に乗ってきて、それぞれこの樓の素晴らしさを話し楽しんだ 見下ろすと海面ははるか低く見え、老樹は他の木々とも浮かんだように見える 空には月が一つ私を客としてもてなしてくれ、町の明かりはつなぎ止められたくさんの舟をあかあかと照らす 夜明けの鐘が鳴っても人々はまだ起き出さず、天の川はもう西に傾いている	○過去の風景記述の定着 ○老樹＝古代から続くイメージ ○「帰帆」のイメージ ○杜甫の「登岳陽樓」に次韻した詩
第11次通信使(1764) 正使趙繼の 『海槎日記』より	清宵月久徘徊 千丈巖山中海立	為是樓臺照得來 千丈の巖山が海中に立つ、誰が高い所に望鄧台を築くだろうか	○「秋月」のイメージ ○海中に立つ巖山＝君山のイメージ ○杜甫の「登高」に次韻した詩	

かに神仙に従って方丈山を尋ね²⁴⁾、赤間関では、航路手前の小倉城の楼閣を望んで「長生不死の薬がもし有るならば正に此の山中に在るならん」²⁵⁾、鞆浦では「広いことを比ぶれば正に洞庭湖と共に論ずるべきで此の山で長生不死の薬を採取できると夢の中で仙人が私に言ったのだ」²⁶⁾と詠んだ。これらは、除福伝説²⁷⁾のイメージが実景に投影されている。また、この年の通信使は、鞆浦に二泊して、南龍翼は「終日景色を見物したが、楼の前に雨が晴れた後の景色が最も清らかで明媚であった」²⁸⁾とも記している。1682年第7次の金指南と洪禹載はともに、福禅寺から望む瀬戸内海の風景を絶賛しているが、どちらの記述にも見立ての表現はなく、対象景の自然地理的ストラクチャーや風景要素の透視的輪郭像に対して風景生成を行っている。1711年第8次の任守幹の記述は、伝え聞いた表現になっている。しかし、この年の通信使一行は、帰路、鞆浦で経路で体験した風景について語り合い、福禅寺から見る瀬戸内海の風景が日本一だという評価を定着させた²⁹⁾。1719年第9次の申維翰は、先行研究の考察により²⁾、鞆浦では「神仙境」の意味づけをもとに風景生成を行った。1748年第10次の時は、日本側の思惑の違いから、福禅寺ではなく阿弥陀寺が館舎になった³⁰⁾。この行違いに大いに怒った通信使一行は船に引き返してしまったという³¹⁾。この年の正使洪啓禧は、福禅寺をことさらに尋ね詩を残した。「前輩乗槎至 人々説此楼」の行は、第6次から数えて五代、約110年の間に鞆浦の風景記述が定着したことを示している(表-2参照)。また、洪啓禧は、かつての使館を「対潮楼」と名づけ、子息の洪景海に書かせた扁額は、今も福禅寺に残されている(図-1参照)。1764年第11次の趙巖は、「洞庭湖と岳陽楼はまだ見たことがないので」と前置きし³²⁾、過去の通信使の風景記述を確認するかたちで風景評価を行っている。

6次以降の通信使による風景記述においては、以下の基盤的な風景生成の三つの観点があると考えられる。

- a) 漢詩や山水画から得た洞庭湖や瀟湘八景の風景イメージに基づく見立て
- b) 空間の実体的な要件の探索
- c) 「日東第一形勝」の定着

a) の大枠は、福禅寺を岳陽楼に、瀬戸内海を洞庭湖に見立てたのだが、これに瀟湘八景の意味づけが加わる。瀟湘八景のイメージは、宋代の瀟湘八景図にあらわされているものでは、画面全体が煙霞に包まれ、大地、湖面、空の境界がはっきりしない絵が多い。第6次の南龍翼の漢詩の行「楼如蜃結区寰」には、このイメージを連想できる(表-2参照)。瀟湘八景の風景の構成要素には、落雁(秋に雁が隊列を組みながら飛び来たり飛び去る姿)、帰帆(夕刻に船が湊に戻ってくる様子)、青嵐(晴れた日の霞や露、あるいは青葉のところに吹く薫風)、暮雪(夕暮れ時の雪景色)、秋月

(秋の夜空に冴える満月を望む様子)、夜雨(夜に降るしめやかな雨の情景)、晚鐘(寺鐘の鳴り渡る暮れ方の風景)、夕照(ものがみな茜色に染まる美しい夕映えの風景)がある。これらのどれかが鞆浦の風景の中に見出されることになる。このうち、テキストで取り上げた中では、通信使の鞆浦滞在中に夜の雨と雪が降った日はなく、雁を見た記述もない。残りの五つはすべて該当する。寺の鐘の音、月、舟は表-2の観賞上の特徴で確認できる。「青嵐」に関しては、南龍翼が雨上がりの風景を終日観賞して行った風景生成に類型を求めることができる。b) は、空間の実体的な要件に対応して行われた風景生成で、第7次の洪禹載の風景記述にあるように(表-1参照)、鞆浦の海や山などの自然地理的なストラクチャーや、建物、樹木といった構図の中で主に図となる風景要素の透視的輪郭像が対象景の構成エレメントの中に探索されたことである。また、この過程において、風景を見つめる主体の内面に意味づけられた特定の風景イメージが実景に投影されることになる。c) は、鞆浦の風景が、経路上の他の風景と比較した中で最も優れているという評価に一つの形式的な言葉を与えることで、風景の定着を強く促したということになる。

4. 記述を介した風景の定着経緯

(1) 風景の定着経緯

本研究で考察した通信使のテキストは、1607年の第1次から1764年の第11次までの157年間、11代を数える中2次から5次を除く計7代の紀行文と漢詩集であった。2次から5次までの翻訳文献は入手することができず、本論では考察していないが、第6次の『扶桑録』における風景生成への与件となったことは否定できないと思われる。しかし、『扶桑録』において、鞆浦の風景評価の枠組みが形成されて以降、11次に至るまでの約110年間の文献の考察により、通信使の風景評価の定着が特徴づけられると考えられる。以下に各代での風景の定着を検証する。

第1次の慶七松は、海潮山磐台寺を見て、湘水の風景イメージを鞆浦の風景に最初に導入した。それから約50年後、第6次の南龍翼は、鞆浦の風景を第一だと評価し、洞庭湖の風景イメージに重ねる記述を残した。次の金指南と洪禹載(第7次)はともに、自然地理的ストラクチャーに対して風景生成を行い、c) を導き出している。次の任守幹(第8次)による記述は、自らの観賞ではなく、伝え聞いた風景評価であり、復路における鞆浦での通信使間の協議によってc) を定着させている。第9次の申維翰は、過去の評価を認識したうえで、b) に特化している。次の曹命采(第10次)は、福禅寺が対象景構成エレメントから外されそうになったため、福禅寺から望む瀬戸内海の風景に執着した。同年の正使洪啓禧の漢詩による風景評価には過去の風景記述の定着や風景要素の透視的輪郭像もある(表-2参照)。したがって、この

図-3 風景記述の定着経緯

第10次の時点に至って、a), b), c)の三つの観点が同時に風景生成に関わったと考えられる。続く第11次の趙巖の風景記述には、表-1に見られるようなa)とc)の観点が認められるが、b)の観点からの新たな意味づけはみられない。

図-3に歴代の通信使の風景記述の定着経緯をフローチャートに示す。

(2) 意味づけの図式

6次以降の通信使の風景生成における三つの観点は、過去の通信使の記述を介して定着した鞆浦の風景の特徴と見なすことができ、その意味づけの図式には以下の関係が考えられる。

a)は、b)のために根拠を提供する道具だてになる。b)は、a)の必要条件を満たす要素を対象景の中に求める作業で、この過程で、風景を見つめる主体の内面に空間の実体的な要件が入力される。これは、必然的に主体の個性が発揮される工程になる。洞庭湖や瀟湘八景の風景イメージが、東海の三神山に象徴される除福伝説などの神仙伝から導かれる神仙境のイメージへの拡大や意味づけの深長化に発展する余地を含むことになる。第6次の南龍翼や第9次の申維翰には、この方向性が認められる。c)は、b)によって行われた風景生成が十分条件となつてなされる風景の価値づけである。

これらの観点は、テキストを通じて部分的に次の代の通信使に引き継がれ、そこでの風景生成の下敷きになる。そして、この風景生成の循環は、世代を超えて繰り返されたことになる。すなわち、この三つの観点は、各々の通信使による風景生成の中で、常に同時にあるのではなくて、その都度の状況に応じて取り沙汰されたことになる。そして、第10次の代のときに、福禪寺からの風景価値が強化されるのに伴い、a), b), c)の観点が風景観

賞の図式としてパターン化されたと考えることができる。図式の内容は、歴代の通信使の風景記述によりa)が風景を見つめる主体の内面に意味づけられ、それを確かめるためにb)が行われ、次に鞆浦の空間の実体的な要件により、風景と対峙する主体は風景価値を認識し、c)が定着したということになる。次の第11次でもこのパターン化は継承されているが、b)におけるオリジナルな発展が見受けられないことも確認できた。

5. 結論

本研究によって得られた結論は以下の通りである。

1) 歴代の朝鮮通信使による鞆浦での風景記述には、中国洞庭湖の風景イメージが最初の下敷きになっており、自然地形風景と人文風景の両方に、その意味づけが採し当てられることにより、経路の中で第一だという評価に繋がった。

2) 7次以降の通信使の記述では、鞆浦での過去の風景記述を受け継ぐために、風景イメージの意味づけを探索したが、それは自然地理的なストラクチャーや風景要素の透視的輪郭像の認識を深めることになり、必然的に風景を生成させた。

3) 第9次の通信使の記述においては、鞆浦の空間の実体的な要件の認識が深まると、当初の洞庭湖や瀟湘八景の風景イメージを、その元となる「神仙境」の意味づけまで深長化させて風景生成を行った。

4) 10次以降の通信使による風景記述には、第9次までの与件通りに、洞庭湖・瀟湘八景の風景イメージの探索、空間の実体的な要件の確認、風景イメージの実景への投影、「第一形勝」の生成というパターン化された図式が定着したが、その反面、主体の内面におけるオリジナルな意味づけは、手薄となった。

注及び引用・参考文献

1) 西田正憲 (1999): 瀬戸内海の発見: 中公新書, 44-50
2) 西嶋啓一郎・仲間浩一 (1999): 江戸時代の朝鮮通信使による風景認識と体験記述の特徴に関する研究: ランドスケープ研究 62 (5), 673-676
3) 慶七松・若松實訳 (1997): 海槎録: 日朝協会愛知県連合会, 21-37
4) 南龍翼・若松實訳 (1991): 扶桑録(上): 日朝協会愛知県連合会, 30-153
5) 金指南・若松實訳 (1990): 東槎日録: 日朝協会愛知県連合会, 24-44
6) 洪禹載・若松實訳 (1989): 東槎録: 日朝協会愛知県連合会, 17-47
7) 任守幹・若松實訳 (1993): 東槎日記: 日朝協会愛知県連合会, 26-57
8) 申維翰・姜彦彦訳 (1974): 海游録: 東洋文庫, 18-103
9) 曹命采・若松實訳 (1993): 奉使日本時間見録: 日朝協会愛知県連合会, 5-83
10) 趙巖・若松實訳 (1995): 海槎日記<日記篇>: 日朝協会愛知県連合会, 38-131
趙巖・若松實訳 (1997): 海槎日記

<酬唱録編>: 日朝協会愛知県連合会, 46
11) 鞆の浦歴史民俗史料館編集: 朝鮮通信使漢詩集: 鞆の浦歴史民俗史料館, 23-45
12) 岳陽は、州名では岳州, 群名では巴陵群という。
13) 岳州刺史に左遷されていた張説が、開元四年(716)に岳州城の西の城門に楼を築き、南楼と呼んだ。それが後の岳陽楼である。
14) 洞庭山とも呼ばれる。
15) 山岳それ自体を神と見なし、また祖霊や精霊の棲む所として宗教的崇拝を捧げ、寺院を設けて儀礼を行う信仰。
16) 伝説中の古代の天子、舜帝が亡くなったとき、舜の二妃、娥皇と女英は、あとを追って湘江に身を投げて死んだと伝えられる。その二人を祠つてある墓。
17) 秦の始皇帝が前219年に、自信の不老長寿を山神や地神に祈禱するために行ったといわれる呪術儀式の印。
18) 四川大学古籍整理研究所編 (1997): 諸子集成補編十: 四川人民出版社, 815
19) 11世紀後期(北宋の神宗帝の頃)中国の画家。

20) 新藤武弘 (1989): 山水画とは何か: 福武書店, 119
21) 前掲書1), 48-49
22) 海潮山磐台寺・山陽新聞社編 (1996): 歴史散歩鞆の浦今昔: 山陽新聞社, より転載。
23) 中国戦国時代, 楚の国の政治家, 名は平, 号は原。懐王・頃襄王に仕え、三閭大夫などを歴任、謀略に陥り、放浪生活をして汨羅水に溺死する。紀元前343?~277?。
24) 前掲書4), 102
25) 前掲書4), 113
26) 前掲書4), 146
27) 方士除福が始皇帝の命を受け、東海中の三神山へ不老長寿の仙薬を採りに出かけたことが『史記』に記されているが、わが国の伝承では、除福は日本に漂着してすみついた、とされているものがある。
28) 前掲書4), 147
29) 前掲書1), 46
30) 李進熙 (1992): 江戸時代の朝鮮通信使: 講談社, 121
31) 前掲書30), 122
32) 前掲書10) <日記篇>, 127

Summary: In order to understand landscaping it is important to understand that there is a projection of image into the reality. In this report the writings of Korean envoys to Japan have been studied; in particular, the similarities they found between Setonaikai Tomonoura and the Chinese landscapes Dohteiko and Shohshoh-Hakkei reported in Chinese poetry. The analysis of these writings revealed similar patterns of thought; namely that the envoys considered Setonaikai Tomonoura to be the most beautiful landscape in Japan because they saw their common image of Dohteiko and Shohshoh-Hakkei reflected in the reality of Setonaikai Tomonoura.